UNITE FOR GOOD
Rotary MATSUMOTO EAST
２０２５－２０２６年度会報
会長／村山智計　幹事／吉池裕一
2026. 2. 6. №23 通算№1898

事務所／松本市深志 1-1-21　中田歯科ビル 5F
TEL:0263-36-7737　FAX:0263-36-6009
例会場/ホテルブエナビスタ　例会日/金曜日 12:30

２月 27 日(金)の予定
休会（クラブ定款）
３月６日(金)の予定
雑誌評論、水と衛生特集

委員長/福田雅春
副委員長/北澤清隆　委員/土屋久
籾山志基　百瀬敏男　太田隆治

☆★☆★☆★

【ゲスト講演】

チャンチーユエン様

信州大学グローバル化推進センター

私が日本文化に触れるようになったきっかけについて話します。多くの人が日本文化と聞いて、まず思い浮かべるのは、アニメや漫画かもしれない。しかし私の場合、アニメにはあまり関心がなく、むしろ早い段階から、日本文学という静かな世界に引き寄せられた。中学生の頃、初めて読んだ日本文学作品が、『伊豆の踊子』や『ノルウェイの森』だった。当時は、日本語も日本文化もほとんど理解できておらず、作品の背景や時代性を意識する余裕もなかったが、登場人物たちが抱える孤独や、言葉にならない不安、心の揺れには、不思議と強く心を掴まれた記憶がある。

高校生になると、さらに多くの日本文学に触れるようになった。ある日、授業中にこっそり『雪国』を読んでいたところを先生に見つかり、本を没収されたことがある。当時の私にとっては、それほどまでに物語の世界が現実よりも強い引力を持っていた。冒頭、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という一文は、一瞬で白く静まり返った世界を立ち上がらせる。詳細な説明はほとんどないに、冷たい空気、音のない風景、人の気配までもが自然と想像される。この一文に、日本文学が持つ表現の力、そして沈黙や余白の豊かさを強く感じずにはいられなかった。

やがて日本文化への関心は文学だけにとどまらなくなり、日本史へと広がっていった。そのきっかけとなったのは大河ドラマで、『秀吉』や『真田丸』そして近年の『鎌倉殿の十三人』などを通して、歴史上の人物が感情を持ち、迷い、選択を迫られる存在として描かれるのを見て、日本史が一気に身近なものになった。歴史は、結果を暗記するためのものではない。無数の選択肢の中から、たまたま一つが選ばれ、その積み重ねとして今が存在している。その事実を知ることで、過去は単なる過去ではなく、今の私たちと地続きのものとして立ち上がってくる。文学も、歴史も、私にとっては常に同じ方向を向いていた。日本文学に描かれる沈黙や余白、日本史に繰り返し現れる栄枯盛衰は、どちらも人間の弱さや迷い、そしてそれでも生きようとする姿の美しさを、静かに映し出している。

もちろん、今でも日本語は難しい。日本語の文章と向き合う時間は、自分自身の思考と向き合う時間でもあり、その積み重ねが、少しずつ世界の見え方を変えてくれる。私にとって日本語学習の原点は、アニメでも流行でもなく、一冊の文学作品と、一つの歴史の場面だった。そこから始まった関心は、今も形を変えながら続いている。これからも日本語を通して、文学と歴史の中に生きた人々の声に耳を傾け、人が生きるとはどういうことなのかを考え続けていきたい。

リ コウリン様

松本大学 交換留学生

松本に来たばかりの頃、私は迷っていました。言葉や文化の違いの中で「自分はここで何ができるのだろう」「なぜ日本に来たのだろう」と考える日々が続いていました。

そんな中、私の心に深く残る出来事があります。松本に来たばかりの頃、寮の近くは交通の便が良くないことを聞いて、事前に中国から自分の自転車を郵送してもらいました。自分で組み立てたけど慣れていないせいでうまくできなくて、試し乗りの時に転んでしまいました。それから説明のウェブを見ながら直し、防犯登録のため近くの自転車店を訪れました。登録を終え、先程転んだことを思い出し自転車の状態を確認してほしいと思いましたが、その時「転ぶ」という日本語が急に頭の中で出てきませんでした。身振りや手振りで必死に伝えようとする私を見て、店の年配の男性は少し驚いた様子でした。「お嬢さんは、どこ出身ですか。」「私は中国人です、松本大学に留学しています」と伝えました。するとその方は、とても自然な中国語で自己紹介をしてくださいました。驚いたのはその発音の正確さで、その方は、約 10 年前から、この近くで地域交流活動に関わり、松本大学の留学生と知り合って、中国語を学ばれたそうです。当時は、50 人ほどの中国人留学生が地域と交流していたと聞き、現在の状況との大きな違いに強い衝撃を受けました。その時、私は初めてコロナ禍によって国際交流が静かに、しかし確実に失われていった現実を実感しました。それから、当時の交流活動や今も続いている活動について教えてくれました。最後に「ぜひ地域活動に参加してね」と声をかけてくださったその一言は、迷っていた私の心に静かに響きました。

現在、日本と中国の関係は、必ずしも良好とは言えない状況にあるかもしれません。しかしこの出会いを通して、私は国と国の関係がどれほど複雑であっても、人と人とのつながりは、誠実で温かいものであり続けることができる、と強く感じました。この経験をきっかけに、私は地域活動や国際交流に少しずつ関わるようになりました。私は、山本さんのように、誰かと誰かをつなぐ「架け橋」のような存在になりたいと願っています。一人ひとりの小さな出会いや思いが積み重なり、やがてそれが国と国をつなぐ力になります。日中関係も、そうした人と人との交流の積み重ねによって、少しずつ、より良い未来へと向かっていくのではないでしょうか。

【点鐘 13：30】 **村山会長**

今週の シネマ画報

「アラビアのロレンス～砂漠のバランスシート」